

---

# 魔法世界と高校生

藤枝夏彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法世界と高校生

### 【Nコード】

N4099Z

### 【作者名】

藤枝夏彦

### 【あらすじ】

2030年

現代の魔法はかなり手軽なものになり誰でも使用出来るようになった。

初

最初に

「魔法」

魔法とは呪文を唱えたりして行うが、この世界では違う。魔法を使用するには魔法結晶石まほうけつしよせきが必要となる。

魔法結晶石とは魔力が込められた結晶石である。

人間は誰でも魔力を所持している。だが魔力を所持しているだけでは魔法は使用は出来ないのである。

魔法を使用するにはおのれ自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきで変換する必要があるのだ。

けれど魔法結晶石も無限で使える訳でも無い。例えるなら拳銃と  
かと同じで弾数が無くなると使用出来なくなるのである。

使用出来なくなった「魔法結晶石まほうけつしよせき」は専門のショップに持っていき  
補充する必要がある。

補充するにはショップへ行き己自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきに変換すれば  
再び使用する事が出来る。

魔法結晶石を使用した魔法にも種類があり主に火水風雷土光の6種類  
と補助魔法に分けられる。

基本攻撃系魔法は6種類の中の1種類しか使えないが補助魔法は別  
で誰でも気軽に使用する事が  
できる。

今、この世界には4つの魔法高校が存在する。

ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、日本の4校である。

このいずれかの高校を卒業すると国家公務員クラスの待遇を受ける  
事が出来るので毎年何万人もの  
受験生がいるのである。

これがこの世界における魔法である。

「4月15日」

日本魔法騎士学校これが今日から俺が通う魔法高校。 といつても1週間前が入学式なのであるが手続きの問題上入学式には出れず、今日が初登校になる。

なのだが完全に寝坊してしまい急いで学校に向かっている途中である。

「やばい！やばい！完全に遅刻コースだ！」

「俺ちゃんと目覚ましかけたはずなのに・・・」

髪の色は漆黒の黒、髪の長さはやや長めで目にかかる位、制服を少し着崩して着ている

「志木野春樹」

は通学路を走りながら自分の制服のポケットに入っていた携帯を確認すると

「電源入ってねえじゃねーかよ！」

と一人で叫び

「参ったな、入学式に出れなかったし、今日が初登校になるのに初日から遅刻かよ」

つと春樹は最初こそは急いで走っていたが走るにつれ確実にペースが落ちていた。

「はあ、はあ、はあー」

春樹は息を切らしながら

「あーだめだキツイ諦めるか。」

つと完全に走ることを諦め歩き出し

(体力落ちたな〜運動不足かな。ここの学校受かる為に勉強ばっかしてたしな。)

とか

(この学校どんだけ広いんだよ)

っと思いなから春樹は学校への道を歩いていた。

ちなみにこの学校の広さは半径10キロにも及ぶ広大な学校である。

この敷地内に学生寮

があるのだが校舎は中央にあり学生寮は東の端にある。一応自転

車通学も可能であるが

春樹は持つていないので徒歩になる。

(8時15分かゝ えーと確かHRは8時半だったよな。まだここからだと20分位掛かるな)

と思いなから通学路を歩いていると、自分と同じように歩いている女生徒がいた。

(俺と一緒に遅刻組みかな)

っとか心の中で思いなから歩いていると前を歩いていた女生徒がいきなり立ち止まりすぐ傍にあった桜を眺めだした。

「……………綺麗」

っとその生徒は小さく呟いた。後ろを歩いていた春樹は

「綺麗ってもう桜の花も大分散ってるぜ」

っと思樹はその女生徒に話しかけていた。

「えっ?」

と言い少し驚いた女生徒はこちらを振り返った。その女生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言言葉が凄く似合う少女であった。

「あ、いやゴメン」

っと思樹は

(あれ?なんで俺今話しかけたんだろ。)

「うんうんいいの確かに桜もかなり散っちゃてるし……………」

「でも私っつて桜観たのっつて初めてなの。」

っと思樹は少し寂しそうな顔で答えた。

「いいの?このままじゃと授業に間に合わないよ」

つと女生徒が春樹に話しかけてきた。

「おつとそうだそうだ」

さすがにこれ以上遅刻はヤバイと思った春樹は

「じゃあ俺先行くわ。」

「君はいいの？」

春樹はそう女生徒に「尋ねると

「うん。私はもうちょっと桜を観てから行くから。」

「わかった。じゃ先に行くわ。」

といい別れ際に

「あ、俺志木野春樹ていうんだ学校で会ったらよろしくな。」

つと女生徒に言うつと

「うん。よろしく私は冬野雪<sup>ふゆのゆき</sup>」

つと彼女が答えてくれたので春樹は手を振って別れた。

8時45分

春樹はどうにか学校にたどり着き下駄箱で上靴に履き替えて春樹は廊下を歩いていった。まだ廊下

には生徒が何人かいておそらくHRが終わったばかりなのであろう。その中で春樹は

（え〜つと職員室だよなつてえ職員室て何処だよ。くそお学校の中も広すぎだ。）

つと思ひ広い校内を歩いていると

「おおいい！！」

と後ろから怒号をいわれ振り返ると

「おい！お前1年だろ！なんでこっちの校舎歩いていやがる！」

と金髪ピアスの男がこちらに歩み寄ってきた。近くにいた女生徒達は口々に

「やばいよ。あの子」  
や

「1年生だからここのルール知らないのかな？」

「私、先生呼んでくる。」

などと、周りにいた女生徒達はちよとしたパニックになっていた。

春樹は

(初日から最悪だ。まさか絡まれるとは・・・俺的には目立ちたくないんだが・・・)

つとか考えているとその金髪ピアスの男子生徒が春樹の前まで来て

「おい！聞いてんのか！」

つと怒号を飛ばしてくる。春樹はこれ以上絡まれても面倒なので

「はい、聞いています」

つと答え

「すいません。今日から初登校なんで職員室を探していたら間違えてこっちの校舎に入ってしまったんです。」

春樹が素直に謝ると金髪の男子生徒は

「ちっ」

と舌打ちをして

「職員室は向こうの校舎だ。さっさと行け」

と金髪男子生徒に言われた春樹は「ペッコ」

と1度頭を下げその場を後にした。

初（後書き）

初小説になります。



## 初登校そして出会い2

春樹は金髪ピアス男子生徒にいわれた校舎に行くとすぐに職員室が見つかり、春樹は

「あっここか」

「コンコン」

と2回職員室の扉をノックし

「失礼します」

つといい春樹は職員室の中に入っていった。

職員室の中はまるで図書館のようで魔道書や参考書などが積み上げられ本当

に職員室か？と思う程である。春樹はすぐ傍にいたの男性教諭に

「あの〜すみません」

つと声をかけ

「今日からここの学校でお世話になります。志木野春樹しきのはるきです。」

つと男性教諭に挨拶すると

「ああ1年生の子かあちよつと待って」

角刈りでいかにも体育教師丸出しな男性教諭が大きな声で

「二条先生、二条先生、先生の所の生徒がやつと着ましたよ」

と呼ぶと奥の本の山の方から

「はい今行きます。」

つと奥の本の山から淡い栗色の茶色の髪で腰くらいまでの長さの髪でかなり童顔身長も春樹よりかなり低くまるで同い年の同級生みたいな女性出てきて

「あゝ君が志木野春樹君ね。ようこそ魔法騎士高校へ。あたしは君の担任の二条未来にじょうみらいよろしくね。科目は魔法学ね

つてか来るの遅いよ志木野君もうHR終わっちゃてるからね。」

つ少し怒り気味で春樹に近づき

「志木野君次遅刻したらぶん殴るよ」

満面の笑みで拳を握り怖い事を言ってきた。

(教師が生徒をぶん殴るつて。 いいのかよ・・・)

春樹が苦笑しながらそんな事を考えていると

「じゃあ1限目あたしの授業だからその時にクラスの皆に紹介するね あつ志木野君の

クラスは1-4だから」

「あつ、ちなみにランクはFね。」

と担任の二条が笑いながら言ってきたので  
春樹はコクンと頷き

「はい、わかりました。」

と答えた。

「じゃあちよつとあたし授業の準備してるからそこでちよつと待っててね。」

といいまた担任の二条は本の山へ消えていった。

(Fランクねえ・・・まあ俺の今の状態だったらFランクがいい所だよな・・・)

まあその方がいいか目立たなくて・・・色々と・・・)

春樹は「くすつと」誰にも気づかれなくらいの笑みを浮かべた。

その場で待たされ待つ事5分程で担任の二条未来が片手に教科書も持って現れ

「いやぁお待たせお待たせじゃあ志木野君教室行こつか」

つと二条がいい

「あつ、はい」

と春樹は答えた。

教室に向かう途中で春樹は二条に

「そういえば先生は魔法ランクはいくつなんですか?」

そう聞く右手を腰にあて二条は笑いながら

「あつは あたしのランクはBランクだよ」

つと胸を張っていつてきた

「魔法ランク」

とはSランクからFランクの7段階で決められ、この世界でもSランクの魔道師は10人しかいないこの10人は「大魔道師<sup>だいまどうし</sup>」と呼ばれている。主にこの世界を動かしている人間がこの10人である。

「Aランク魔道師」

このAランク魔道師でも100人程しかない。その殆どが魔法騎士<sup>まほうきし</sup>である。

「魔法騎士<sup>まほうきし</sup>」

とは魔法が使える警察みたいな者である。ちなみにこの「魔法騎士」に席を置くには

かなりの至難であり超エリートでも必ず入れるものではない。

「Bランク」

だからこのBランクでも世間一般ではエリートなのである。

Fランクとはその中でも1番下なので使える魔法の種類も一般人のそれとほぼ変わらない

位である。この学校では最低でも卒業までにはCランク魔道師になれる様に教育が行われる。

「あ、志木野君教室ここだよ。」

どうやらここが教室らしい。廊下の一番端の教室に1・4と書かれたプレート

そして、

「春樹の運命を大きくかえる事になる者達に出会う。」

初登校そして出会い②（後書き）

今回は少し短いです・・・

### 初登校そして出会い3

「先生、あの子が入試の時の模擬戦闘でアレックス先生を倒した子ですか？」

中年で眼鏡を掛けた教師が職員室でマイカップでコーヒーを飲みながら角刈り体育教師にそう尋ねた。

ちなみにこのアレックスと言う教師だが学生時代ボクシングの選手だったらしい。

「ええ、そうらしいですね。 私はその場に居なかつたんですが、教官をしていた二条先生が

言ってたんですが、凄かつたらしいですよ。」

角刈り体育教師が二カーと笑いながら答え

「あのアレックス先生を一発で倒したんですよ。 私も一度戦つてみたいですよ。」

と角刈り体育教師が言うと

「いや、いや先生が戦つちや駄目でしょ。 けが人がでちゃいますよ」と、中年眼鏡教師は笑いながら答え

「まあ、そうですね。 あっはは」

角刈り教師と中年眼鏡教師の笑い声が職員室に響いた。

「おーい、じゃあみんな一席に着いて授業始めるよー」

担任の二条未来（ニジョウミキ）は手に持っていた教科書を手でポンポン叩きながら教室のちよつど

真ん中にある教壇の前に立つとそれまで自分の席から離れていた生徒達が

「はい」

といいながらそれぞれの席に戻って行き全員自分の席に着くと担任の二条未来が

「授業始める前に皆にお知らせあるよー」

二条未来が笑顔で生徒達に言うと言番後ろの席座る短髪の生徒藤峰ふじみ蓮司ねれんじが

「この授業前の発表ゆうたら・・・まさか未来ちゃん転校生かー？」

関西弁で短髪の藤峰蓮司が生徒が立ち上がり嬉しそうに聞くと

担任の二条未来は胸の前で腕をクロスにさせて

「はい残念。転校生じゃ無いよ。」

と答えると、関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司が少し残念そうに

「なんや〜ちゃうんかいな〜 じゃあ未来ちゃんお知らせっていつ

たいなんなん？

はっ まさか抜き打ちテストや無いやろうな？

そんなんホンマにアカンでテストなんかされたら俺絶対赤点やわ〜」

関西弁短髪男子生徒は少し青ざめた顔で担任二条未来に聞いてみると

「蓮司ねれんじうるさいよ。全く話が前に進まないじゃん。」

担任二条未来は呆れた顔で関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司に指摘する。

「ゴメン、ゴメン。で、未来ちゃんお知らせっていつたいなんな

ん？」

関西弁短髪男子生徒不思議そうな顔で二条未来に聞いてみる。

「えーと入学式の時からずーと空いていた席があるでしょ。ちよ

うど蓮司の前の

席今日からその席の子が来るから。」

二条未来は少し疲れた顔でクラス全員に伝える。するとまた関西

弁短髪男子生徒

藤峰蓮司は騒ぎだし

「ホンマか!!! ずーっと前の席空いとったからめっちゃゆ気になっ

とてん。

え？まさか女の子かいな」

などと騒いでいると藤峰蓮司の生徒の隣の席の女生徒が立ち上がり「ちよつと！ 蓮司少し黙って！ 話が前に進まないじゃない。」

隣の席に座る女生徒ポニーテールで髪の色は少し淡い茶色長谷川美羽はせがえわは

隣の席に座る藤崎蓮司に指摘し

「おゝ恐まじ美羽は俺の所のオカンより恐いで」

などと言うと他の生徒達がクスクスと笑いそんな事を言われた本人は顔を真っ赤に染め

「蓮司！アンタあとで覚えておきなさいよ！！」

と言い頬を膨らまし長谷川美羽は席に着きそれを観ていた二条未来は笑いながら

「うん やっぱりいつ観てもあんた達二人の夫婦漫才は面白いよね。」

などと言うとクラスでどつと笑いがおきそんな事を言われた二人はかなり恥ずかしそうにし

「先生！何で私がこんな奴と夫婦なんですか！」

長谷川美羽顔を真っ赤にし立ち上がり大声で言い

「そや、そや俺ももつとおしとやかな子がタイプや」

藤峰蓮司も立ち上がり反論する。

「ゴメン、ゴメン謝るから席に着いて。」

そう二条未来が言うと藤峰蓮司と長谷川美羽はしぶしぶ席に着いた。

「じゃあ、話がかかなりそれちゃったけど話戻すね。」

二条未来がそう言うのと廊下で待っている春樹に

「じゃあ志木野君入ってきて。」

そう二条未来に言われると廊下でかなりの時間を待たされた春樹は（やつとかよ。あまりにも話が進まないから忘れられてるのかと思っただ。）

そんなことを考えながら春樹は教室のちょうど真ん中にある教壇の

傍に行き

担任の二条未来の横に立つ。

「じゃあ志木野君、自己紹介よろしく。」

担任の二条未来そう言いながら黒板に春樹の名前を書き少し横にずれ春樹は

教壇の前に立ち

「えーと志木野春樹あきのの 春樹です。入学の手続きでちょっと

登校するのが遅くなりましたが。今日からよろしくお願いします。

」

春樹は「ペッコ」と頭を少し下げ自分の紹介を行った。

「志木野君は海外暮らしが長くて日本に帰ってくるのも十年振りらしいから

みんな仲良くしてあげてね。」

担任の二条未来があまりにも少ない春樹の自己紹介に付けたしそう言い

「じゃあ志木野君の席は真ん中の一番後ろの席の前の席ね。」

担任の二条未来にそう言われ春樹は指示さらた席に着き持っていたかばん

を机の横に掛けた。席に着くとすぐに後ろに座る生徒から

「今日からよろしくな。俺は藤峰蓮司ふじみね れんじや普通に

蓮司と呼んでくれ。俺もお前の事春樹て呼ぶさかい。」

と言われた春樹は

「わかった よろしく蓮司れんじ。」

春樹はふつと自分の横の席を見ると空席だったので

「一つ聞いていいかな」

と後ろの席に座る蓮司に聞くと

「ええで。どないしたん？」

と蓮司が答えたので

「俺の隣の席の子は今日は休みなのか？」

春樹がそう蓮司に質問してみると



「いやー悪い 俺ちよつと分からへんわ」

蓮司は少し気まずそうに答えたので春樹が不思議そうにしていると蓮司の隣の席に座るポニーテールの少女が

「私は長谷川美羽。はせがえわみう 気軽に美羽みうて呼んでね。」

春樹君つて海外から来たんだよね 何処の国からきたの？」

自己紹介をした長谷川美羽は目をキラキラさせ帰国少女春樹に質問してきた

(うーん・・・どうやって答えようかな)

と考えていると

「こらーそこお」

担任の二条未来が人差し指をピツシと春樹達の方へ向け

「その聞きたい気持ちも分かるけど、もう授業始めるからそうゆう質問タイムは授業終わってからにしてね。」

担任の二条未来がそう長谷川美羽に言うとし少し残念そうにし机に置いてある

魔法学の教科書に視線を戻す。 それを確認した二条未来は自分の手元にある魔法学の教科書

を開き

「じゃあ昨日の続きの16ページからやるね」

と担任の二条未来が言うところクラス中の生徒達も言われたページを開き教科書に目を通していき

春樹も言われたページを開き目を通していくが

(結構難しいな、俺こつという理論の話はよく分からないな)

など考えていると突然教室の前の扉が開き担任の二条未来が「もう授業始まってよ。早く席に着いて」

と言うと遅刻してきた生徒は

「ごめんなさい。」

と言い自分の席に向かう。春樹は目を通していた教科書から横目で隣の席を見ると

(他の席は全部埋まっていたから・・・あゝ隣の席の奴か)

と見えこちらに向かって来る生徒の方を見ると生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言つ言葉が凄く似合う少女

「冬野雪音ふゆのゆきねだった」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4099z/>

---

魔法世界と高校生

2011年12月18日23時52分発行